

住宅平面の時系的变化に関する基礎的研究

～ 第1報 L・D・Kタイプの変化について ～
神戸山手女子短大 中西真弓

目的 戦後住宅の洋風化が進行する中で、それが最も端的に生じたのは居間(L)と食事室(D)と台所(K)の構成であった。いわゆるL・D・K型は今日では住宅平面の典型的指標として定着している。今回はS30年代以降の住宅平面を基に、その時系の変化を考察した。

方法 S30年代～S60年代の電鉄会社の分譲建住宅と公共集合住宅の平面図を収集し、そのL・D・K構成の推移を考察した。収集した平面図は562件(戸建314,集合248)である。

結果 平面図のL・D・K構成の分布は「L+DK」型が60%と最も多く、この傾向は戸建と集合に共通する特徴であった。また、平面図の平均室数は戸建で5.6室、集合で3.7室と両者に2室近くの差があった。ところで、部屋数とL・D・K構成の関係を見ると1室レベルでは当然ワンルーム型の「LDK」型が多いが、2室レベルでは「K」型が最頻値を占めている。また3～4室レベルに室数増加が進むと「DK」型と「LDK」型に分解してゆくが、更に5～6室レベルにまで増加すると、L分離が顕著になり「DK」型が80%を越えている。時系的にみると、戸建ではS30年代には「LD+K」型が65.5%と最も多かったが、S40年～S50年代になると「L+DK」型が90%近くまで急増している。しかし、S60年代に入ると「LDK」型が増加の兆しを見せている。集合でもS30年～S40年代には「L+DK」型は約60～70%と主流を占めていたが、S50年～S60年代にかけては「LDK」型が増えて約70～80%以上の高率に達している。以上の結果、L・D・K構成は戸建住宅・集合住宅の双方とも時系的な居室増加の変動とともに、一定水準までは3室の機能の統合化への変化を辿ってきたことが指摘できる。